

# コロナ対応「経験は財産に」

## 清水日赤病院 3年間の活動を報告

【清水】新型コロナウイルスが8日から5類感染症に移行したことを受け、清水赤十字病院（藤城貴教院長）は同日、新型コロナ対応の一つの区切りとして、約3年間にわたり院内の各部署がどのように対応してきたかを振り返る報告会を開いた。



藤城院長は、災害時のチ

ーム医療は、事前に手順や対応などを確認するフリーフィンクを行い、終了後に活動などを振り返る「デブリーフィング」に臨むことが基本」と説明。その上で「当初は医療関係者もどう対応するか手探りだった。5類感染症に移行したことは一つの区切りであり、気持ちの切り替えのため報告会を開いた」と話した。

報告会には、藤城院長や看護師の医療スタッフや事務職員ら約40人が参加。病棟や臨床検査、臨床工学、放射線科など部署ごとこれまででの対応について報告した。

看護師の一人は、発熱外来を開設した当初を振り返り、「初めてのことで相当なストレスがあった。事務

約3年にわたる新型コロナへの対応について部署ごとに説明した報告会

もずっと電話対応に追われていた。互いに協力、励まし合った。この経験は今後の財産になる」と強調。臨床工学技師は「感染した透析患者を管内で最も多く受け入れた。他部署と連携できたことが良かった」と述べた。

藤城院長は「パンデミック（感染症の世界的な流行）は100年に1回起こると言われている。どう対応したか、後世に伝えていかなければいけない」と語った。（平田幸嗣）